点　訳　と　私

中井　史朗(SA13 期)

私は、殆ど毎日点訳作業をしています。何から、書こうかと思案しましたが、思いつくままに、とりとめもなく、お話しすることにいたしました。点字とのふれあいは、「さあ、ボランティア奉仕をしよう」などと意気込んで始めたわけではありません。妻が、吹田の母子会の点訳グループに所属して、もうかれこれ 20 年にもなりましょうか。私がまだ会社勤めをしていた頃は(１０ 年以上前)、妻の作業を横目に見ていただけで、時々読み合わせ校正の手伝いをする程度でした。会社をリタイアしてから、私を待っていたのは、妻の点訳作業に参加することでした。日本ライトハウスの盲人情報文化センターでの 6 ヶ月の講習期間を経て、メンバーの一員となったのは平成 9 年の 3 月でした。パソコンによる点訳奉仕は、私の日課となりました。大阪肥後橋の袂にある「盲人情報文化センター」を一度訪れてください。右も左も、見るからに賢そうな(実は、本当に賢いのですが)女性の方々が、1 週間分の点訳文の読み合わせ校正をしている姿にお目にかかれるでしょう。木曜日の午後は、「黒一点」の私も垣間見えることでしょう。点訳について詳しい説明は、紙面の関係もあり、省きますが、以下、駄文をお読み下さい。

皆さん、ご存知の方もおられるでしょうが、点字とは、目の見えない、いわゆる視覚障害者が、目の見える晴眼者(せいがんしゃ・健常な視覚を有する人)が目で文字を読むのに代えて、指で(主に人差し指と中指の腹で)紙面に印字された突起(これを点字という)に触れて読み取る(これを触読という)もので、フランスのブライユという人が作りました。

私たち点訳するものは、触読はできませんが、盲人の方が触読をマスターするのは、習練と努力を要するのではないかと思われます。日頃、我々は、何とも思わないで日本語を読んでいますが、弁慶読み(べんけいがなぎなたを・・・)のように、どこで区切って読むかによって意味が違ってくるのが、日本語なのです。英語の文章は、一つ一つ単語が区切られています。そこで、点字で言葉を表す場合には、言葉を区切らなければ、正しく意味が伝わりません。

点訳では言葉の区切り方（これを分かち書きと言います）が重要なことなのです。次に言葉、単語の読み方も大切です。目で見て、発音しなくても、漢字では意味がわかります。しかし、点字の場合、必ず発音を点字で表さなければなりません。

しかも、正しく、そして適切な「読み」でなければなりません。例えば、明るい日「明日」と書いてどう読みますか？「アシタ」、「アス」、「ミョウジツ」、「ミョウニチ」というように、その言葉がどのような状況で使われているか、前後のかかわりから、正しく判断する必要があります。また、辞書にある正しい読みでない、誤った読み方を多くの人が何の不思議とも思わず、平気で使っています。例を挙げたら、きりがありません。逆に言い換えると、それほど日本語は曖昧な言葉なのでしょう。

私にとって、点訳の毎日は、言い換えるなら、日に何回も重たい「広辞苑」を手にとり、「ブリタニカ国際大百科事典」と首っ引きの毎日と言えるでしょう。「六十の手習い」でなく、「七十越してのお勉強」はまさに大変であります。ああ、しんど！